

済 南 事 件 解 決 重 光 葵

解題（憲政記念館） 渡邊 行男

＜解 題＞

済南事件

今回は、重光葵が昭和4年（1929）2月に上海総領事として赴任し、芳沢謙吉駐支公使を助けて、前年5月に起こった済南事件を解決した手記を紹介したい。順序として済南事件の概要を述べる。

民国15年（1926）7月、蔣介石は国民革命軍総司令となって北伐を開始した。翌年5月、北伐軍が徐州を占領すると、時の日本政府田中義一内閣は「居留民保護」を名目に山東省に出兵した。当時、日本居留民は青島に2万人、済南に2千人いた。しかし出兵の目的は北伐軍の牽制にあった。第1次山東出兵である。このときは9月に撤兵した。

蔣介石はいったん下野して来日、田中首相と会談した。このとき田中首相は「揚子江以南を固めた上で北伐を開始するよう」勧告した。

翌1928年1月、蔣介石は革命軍総司令に復帰、北伐を再開した。革命軍が山東省に入ると、田中内閣は再び山東に出兵した。4月、第6師団が青島に上陸、第11旅団は済南商埠地の警備についた。天津の支那駐屯軍の一部も済南に着いた。この早すぎる出兵には国内でも北伐への干渉と非難の声があがった。

5月1日、北伐軍が済南に到着すると、3日には日本軍とのあいだに衝突が起こった。事は日本軍による革命軍外交処主任ら17名の殺害に端を発した。9日、日本軍は済南城を総攻撃、11日にはこれを占領した。日本軍の集中砲火により、中国側の死者3,600名、負傷1,400名といわれた。市民も含まれている。これが済南事件である。革命軍は済南を迂回して北上した。

事件解決は国民政府との外交交渉に移された。

交渉は王正廷外交部長の強硬な主張で難航し、停滞した。このとき重光葵が上海総領事に任じられて、1929年3月、日本の全面的譲歩でようやく解決した。重光の手記はこの交渉の裏面を詳しく記録していて興味がある。

田中政友会内閣

山東出兵を行ったのは田中義一政友会内閣であった。手記にもあるように、その前の憲政会内閣の幣原喜重郎外相は、ワシントン体制を重んじて対外的には協調主義をとり、中国に対しても不干渉主義をとった。「中国で何人が政権をとるか、いかなる政策がよいかは、中国民自身が決定すべき問題である」と議会でも述べている。

1927年の漢口事件・南京事件でも出兵論をおさえた。日本居留民が被害を受けたことに国内論調は沸騰し、「幣原軟弱外交」を非難する声があがった。幣原外相はこの事件を「あれは国民軍のなかにいる共産党が外国との紛争を引き起こすことによって、蔣介石の立場を悪くしようとしているのだ。出兵すれば日本が共産党の術中に陥る」と説明している。

しかし居留民を見殺しにしたという国民感情をおさえることはできなかった。これも若槻内閣崩壊の原因のひとつである。若槻内閣は昭和2年の金融恐慌に遭遇して倒れたが、倒閣の先頭に立った枢密顧問官伊東巳代治はあからさまに幣原外交を非難していた。

後任の田中大将はかねてから対中国積極論者であった。前号にあるように、孫文が重光参事官に、軍部の中国侵略を非難し「田中中将にきいてごらんなさい、彼はよく知っている」と言ったその人

物である。田中首相の中国認識は「黙って手を拱いては、共産主義を背景としたロシアの勢力が支那全体を風靡する」というものであった。

そして悪いことに、田中大将を政界に引き出した政友会の策士森恪は、もと三井物産社員として中国で活躍した人物で、田中に輪をかけた対中国積極論者であって、田中兼摂外相の下で外務政務次官となり、彼自身は大臣気取りであった。田中外交はすべてこの森政務次官の方寸に出たものであった。森の悪辣ぶりはこの手記にも出てくる。

悪名高い東方会議を開催したのも森のお膳立てであった。会議の名目は、大陸現地との連絡を緊密にし、対支基本政策を樹立するためであった。会議は第1次山東出兵のあと、昭和2年6月下旬から7月はじめにかけて東京で7回開かれ、さらに8月には大連で開かれている。出席者は現地側から芳沢駐支公使、吉田奉天総領事、高尾漢口総領事、矢田上海総領事ら、政府側から田中兼摂外相、森政務次官、陸軍から畑次官、南参謀次長、武藤関東軍司令官、海軍から大角次官、野村軍令部次長などである。この顔触れから、会議の内容も推測がつく。

会議での要点は、中国におけるわが国の権益と在留邦人の生命財産が侵害されれば自衛の措置に出る、満蒙とくに東三省（満州）における権益の確認と防護にあった。

以上が済南事件の背景である。

重光上海総領事

重光葵は大正14年（1925）3月、公使館一等書記官として北京に赴任し、関税特別会議や治外法権委員会で中国側と折衝をもった。昭和2年（1927）、大使館参事官としてドイツに赴任したが、1年足らずで外務省に呼びもどされ、吉田茂次官は、矢田総領事に代って上海へ行き、芳沢公使を助けて難航中の済南事件解決交渉にあたるよう要請した。

中国問題に深い関心をもっていた重光は期する

ところあって引き受ける。重光の上海総領事任命は「対支協調論者」として任命妨害の工作もあった。森政務次官はむしろ交渉をぶち壊して中国に武力進出したい意向である。重光は「政治は軍部と政府に二分されている」状況のなかで、なんとか交渉を妥結させたいと思うが、外務省のなかにも「革新派」と称する軍部と結んだ一派がいて、強硬な主張をもっていた。重光自身は幣原外交の継承者をもって任じていた。

交渉は秘密を要した。極秘電報も省内の一派によって悪用されるから、請訓もできない。中国側にも胡漢民のような保守派がいて、なかなか合意に達しない。結局、王正廷外交部長とのあいだで、日中相方、賠償を求めず、謝罪もしない相互主義で合意に漕ぎつける。

手記はこの合意に至るまでの複雑困難な交渉事情を明らかにしている。

済南事件解決

1.

記者〔重光〕が参事官として獨逸〔ドイツ〕に赴任したのは田中〔義一〕政友会内閣の時である。北京でチブスを永い間患って、田舎で余後の静養をやった後のことである。

獨逸はヒンデンベルヒ大統領の下で社会民主党ストレーゼマンの国際聯盟を中心とする妥協政策時代であって、ヒットラ出現前の獨逸であった。民政党内閣の幣原〔喜重郎〕外交に似通っている。

田中首相が外相を兼任し、森恪氏が外務政務次官に就任してからいわゆる田中对支積極外交が始められた。記者が獨逸に赴任するため満州を通過して間もなくであった、張作霖の爆死事件があり、それから済南出兵があった。政府は大連会議等を

開き、幣原柔弱外交を攻撃し、しきりに積極外交を高唱した。支那に於ける排日運動は日に熾烈となった。田中積極政策は忽ち行き詰まってどうにもならなくなった。

張作霖の爆死関係者の処罰問題で、田中首相は軍部の攻撃を受けている。一方、済南出兵の後始末はつかぬ。田中首相は森恪氏らの意見に拘らず済南事件をぜひとも纏めたいと考えて、支那から引き揚げて帰っておった芳沢公使を再度上海方面に派遣して、日支国交の障害となっている済南事件から解決せしめようとした。

芳沢公使は出発の際は外務省の方針の意向の外に、特に田中首相兼外相の意のある所を直接聞かれ、よく田中大将の意向を承知していた。要するに田中大将は、芳沢公使の力で出来得るだけ速かに纏めたい希望であって、交渉条件の如きも極めて大まかであったようである。

芳沢公使は堀内〔謙介〕参事官、有野支那語書記官等を随えられて上海に乗り込んで、在上海矢田〔七太郎〕総領事の斡旋で南京政府の外交部長王正廷氏と交渉に入った。交渉は1929年1月某日に急に進行して、翌朝未明迄交渉は一瀉千里に進められて、双方の全権委員は仮署名をする迄に運んだ。日本でも経済界を初め一般は非常に喜んだ。すると、その翌日の新聞は芳沢公使の交渉は行き過ぎで、日本政府は之を承認することは出来ぬと云う記事が乗〔載〕っている。

2.

独逸に参事官として赴任して6ヶ月目に、自分に帰朝命令が来た。噂に依ると東京本省の局長の地位を与えるのだと云われていたが、1月初めに東京に着いて見ると、吉田〔茂〕次官（後の首相）は至急上海の総領事として赴任してもらいたいと言う。

上海には立派な総領事が居るではないかと云っても聞かぬ。上海に行って芳沢公使を堀内参事官

と共に扶けて貰い度いと云うので、止むを得ずその云う通りにして取り敢えず大阪方面の支那関係者にも出合い、墓参もしようと思って大阪迄行くと、済南事件交渉妥結と云うので、大阪人は非常に喜んでいて記者も歓迎を受けたりして、紫丸が何かで神戸から乗船、墓参のため別府に着いた時に数通の電報が渡された。至急上京せよとの外務省の命令であるので、郷里の家は素通りして汽車で直ちに上京した。

外務省に出頭して見ると、吉田次官は、上海交渉は行き詰ったから、直に上海に急行して芳沢公使を助けて交渉を成立せしめて貰い度いと云うのである。交渉の内容を有田〔八郎〕^{アツタ}垂細^{アツタ}垂局長（後の外務大臣）より聞くと、大凡そ次の通りである。

済南事件の解決のための諸条件中、損害賠償も相互平等主義となっており、専門委員会を構成して双方の損害額を決定することになっている。之は明かに芳沢公使に与えた訓令に反している。何となれば支那側は済南に於ては日本軍の攻撃で何万人の住民が殺され、家屋の破壊されたものが無数であると宣伝しているから、多額の賠償金を吹きかけられて、逆に支那側より賠償を要求される羽目に陥る。^{かよう}斯様なことは日本として到底忍ぶことは出来ぬ、と云うのである。

その他の解決事件も相互主義で、済南事件の責任は双方にあって、之に対する陳謝は双方より同時にする。よって南京に於て支那政府若くは日本領事館の建物にも属せぬ場所として、その中間の鶏鳴寺に於て双方の代表が会見し、同時に頭を下げた同じ語の謝辞を述べると云う事迄ある。之は上海到着後明に知ったことであるが、相互主義の建前で事件を解決することが定まり、賠償問題を専門家委員会で審査決定することを日本側が承諾してから、王正廷支那全権は一瀉千里に交渉を進める態度に出で、遂に朝の4時頃迄談判は続けられ仮署名を了した訳である。

日本側も解決を急いだのであるが、日本政府との間に主として賠償問題で行き詰まった。察するに芳沢公使は田中外相からその辺のことはどうでもよろしい、早く纏めることが希望であると云われていた様である。

東京外務省内部は非常な憂慮である。之では賠償問題で将来日支の関係は又々悪化する恐れがあると云うのである。

連日政務官をも加えて首脳部会議が開かれた。政務次官森恪氏の意見は独り全然違っていた。森恪氏は交渉を不成立に終らしめんとする魂胆で、その言説は終始破壊的である。同氏は会議に於てのみならず、記者の出発に際しても特に記者に対して、交渉を成立せしめんとするのが間違の本で、上海は火にせねばならぬ、と述べて記者を反省せしめんとした。

彼は当時すでにこの極端なる思想を包蔵していたのであって、彼の云う積極論は軍部を煽動して日支の衝突を巻き起さんとの野望をもって居たことを記者に感得せしめた。彼の言動は、田中外相はもちろん吉田次官以下手の附けようがなかった。斯様な政見の人が当時政友会の中心にありて、議会議場の争闘を指揮し、民政党内閣を倒し、外務省の中心に居たのであるから、その正反対の事件解決を処理することは、政府としても外務省としても容易のことではないことが明に観取された。

記者が単身上海に着任して上村〔伸一〕領事に迎えられ、^{フランス}仏蘭西租界の家に入ったのは2月の終りであった。支那側は王外交部長の右腕である周龍光^{ウロンクワ}亜洲司長が北京時代からの旧友であるとの理由で、船迄記者を迎いに來て呉れた。

交渉の経過を熟知している上村領事に委細を聴くと、日本側と支那側とは交渉停頓後20日間も睨み合いの姿である。王外交部長は、全権の一旦承諾して仮署名したものが無視せらるるならば全権ではない、それは^{ウソツキ}虚言者である、今後は芳沢氏には道で出会っても挨拶はせぬ、という激しい言葉

で宣伝して内外の新聞を賑わしている。芳沢公使は之を黙殺して毎日ゴルフに行っている。記者は上村領事に、王外交部長は南京に引き揚げたかと聴いたら、未だ引き上げて居らぬ、多分貴下の到着を待っているのではないかと思う、と述べた。

3.

周龍光氏が又尋ねて來て北京以来の話から、今回の交渉のことを述べ、記者の使命に付て探りを入れられたりした。周龍光氏は黃孚氏、王正廷氏と共に北京関税會議時代に佐分利〔貞男〕公使及び記者らと連絡して活動した日本語の達者な人である。記者は周司長に、

「支那側は済南事件を纏めて日本との関係を復旧するの意向が果してありや否や」

を問うた。周氏は「無論ある」と答えた。記者は「然らば支那側は日本側より済南事件に付て損害賠償をとる意向ありや否や、日本側は日支の国交回復を希望するが故に賠償要求の意向なし」

この質問に対する返答には周氏は躊躇したが、「その意なし」と答えた。記者は度々念を押したが同様の返事であった。記者は更に、

「貴下はその条件を含む解決案を王外交部長に代りて、且つ外交部長と連絡しつつ記者と交渉し得るや、即ちその結果は外交部長の承認する所となるや」

と質問したに対して肯定的返答をした。然らば記者も纏めることに努力してみようと云うこととなつて、2週間ほども連日周氏と会見して、解決案が出来上った。鶏鳴寺に於ける同時陳謝も無意味であるというので廃止し、賠償も双方共要求せぬこととした。周氏は王正廷氏の承認を得たと述べたが、この点が一番気がかりなので、記者は直接外交部長に面会してその意向を確めた。

が、果して之が芳沢公使の正式の承諾を得、更に東京の承認を得るや否や、邪魔が入りはせぬかと氣遣われた。芳沢公使は交渉の大体の経過を報

告されていたので、その成立を喜ばれた。が、記者は東京には交渉の片鱗をも電報しなかった。それは森恪の邪魔を怖れたからである。交渉が纏まった後に芳沢公使から電報が初めて出た。

交渉の結果と共に、之は本省訓令に完全に合致しているものでもあり、之以外に交渉妥結の途はないから、之で纏める様にしたいから今度は承認して貰い度いと云う趣旨の電報で、東京に対する最初の電信で最後通牒である。

4.

日本要部の乱脈は実に言語に絶するものがあった。政治は軍部と政府とに二分せられ、策動家は双方に亘って活動し陰謀し、その勢力は政府の要部に配置せられ、秘密を保つことは不可能の有様であった。外務省内に於ても、森恪氏の如きがあり、その後に於て軍部の勢力の延長とも見得べき革新派なるものの反逆的行動に依って、在外使臣の電報秘密は政治的に逆用せられ、策動に利用せられた。在外使臣は電報に於て真意を吐露することに危険を感じ、如何にして逆用さるることなくして政策の遂行をなすかに苦心惨憺せざるを得ない有様であった。

この事態は終戦迄続いた。在外使臣の苦心のみならず、外務大臣として在外使臣に往復する電報に付ても、常に「内部の敵のスパイ」を用心せねばならなかった。実はこの内部の不統一が総ての禍根であった。済南事件の解決も普通の遣り方の様にその都度電信往復をしていたならば、必ず破壊運動が起り、その結果は不成立に終わることは明瞭である。少く共日本側に破壊運動の起る余地のない手段をとらねばならぬ。

済南事件交渉妥結の電報に接した田中首相は非常に喜んだが、森恪氏等を納得せしむるのに、有田局長らは非常に苦心した様であった。しかし纏まったこの交渉を破壊する責任は森恪氏もとれなかった。

日本側が纏まって、恐らく外相からは陛下に内奏されたと思われるが、他方支那側に於て又故障が起った。

当時南京政府はその初期で、内部の複雑なる事情が錯綜して居った。国民党の元老胡漢民氏は蘇聯におけるトロッキーの如き立場で、純理論を振り回して、实际的に物事を処理して行かなければならなかった蔣介石の邪魔者であった。事ごとに理屈が多く蔣介石に楯ついた。のみならず、王正廷氏は外交系には属するも、元来国民党育ちではなく、北京時代には左翼軍閥馮玉祥の協力者として知られていた一人である。

しかるに今日は馮玉祥は山西の閻錫山と共に北方の大勢力として亡さなければならぬ人間である。しかも馮玉祥は隴海鉄道線の中原に拠って日本軍が済南事件の解決によって山東を撤退するならば、直ちに山東にその兵を入れんとする態勢をとっている。王正廷はその問題の交渉に当たっているのであって、頗る微妙な地位に立っている。胡漢民は日本に留学し、戴天仇と共に日本語を解し且つ日本を研究する人であるが、排日運動の中心をなしていた人でもある。この人がいったん日本公使の承諾した案を変更することは承知することはならぬと云い出した。

王正廷氏は進退^{まわ}谷ま^まって南京に帰ることもできぬ。幾度催促しても正式調印の返事は支那側から来ぬ。周龍光亜洲司長は南京に度々往復している。記者は王正廷氏にはっきりと次の通り伝言した。

「支那側にも内部的に複雑な事情があつて困難があるようで同情に堪えぬ。しかし今回の協定は日支大局から見たものであつて、何れの一方の責任をも追及することなく、ひたすら将来日支の關係の改善を誘引せんとしたもので、変更の仕様がな^い。であるから、南京首脳部も喜んで賛成して呉れると思われる。その時期の来る迄何時迄も自分は待つから、その成功を祈る。自分は支那側の不信呼わりはせぬ」

上海でも日本側でも、支那側は信用は出来ぬという観測を下した人々もあった様である。しかし記者は必ず好く展開するものとの期待を変えなかった。結局は済南事件は之で纏まって、一時杜絶えた日支の国交も再開の見透しがついた。

漸く済南事件も解決して日本軍が撤退を開始すると、南京から王外交部長が上海に急行して来て、日本軍の撤退を当分延期して貰い度いと懇請して来た。之が聞かれなければ王正廷氏は南京に帰られぬと迄間接に聞き込んだ。云う迄も〔なく〕山東省を馮玉祥軍が先に取り取る形勢にあるから、蔣介石中央軍が準備の出来る迄日本軍の撤退を延期して貰い退いと云うのである。王正廷氏の政治的立場から見て重大なことである。日本側は要請通りにある期間撤退を延期して、山東省は無事中央軍

が接收することが出来た。

済南事件に引き続いて南京事件も漢口事件も同様な取極めが出来て、長い間日支間の国交を害した紛争は片が付いて、芳沢公使は懸案の国書（信任状）を南京中央政府に提出して之を正式に承認することとなった。

茲に国民政府と日本政府との間に正式に正常関係が成立し、芳沢公使は日本帝国の特派使節として孫文の葬儀に参列するに至ったのである。

重光の文章を紹介するにあたっては、読み易くするためカタカナを平がなに改め、原文を損なわない程度に漢字を平がなに直す（「此の」を「この」）程度の手を加えた。〔 〕は解題者注記。

経済研究会開催のお知らせ

経済研究会を下記の通り開催いたします。御参加下さい。

＊テーマ…中国経済の「再調整」をどうみるか

＊報告者 小島晋治

＊問題提起 山内一男

・日 時 11月7日（月）
午後2時～5時

・場 所 中国研究所 301教室

・会 費 500円

季刊中国研究13号（秋号）

発売予定日 11月初旬

内容：「五四運動」をめぐる学術論争

—— 五四運動シンポジウムの記録

第一部 五四運動論争の前哨戦争

—— 『五四運動の研究』をめぐる論争

第二部 五四運動研究シンポジウム

第三部 さらになる論争のために

—— 『五・四運動史像の再検討』をめぐる

発言者：横山宏章、山田辰雄他

四角号碼検字法講習会

四角号碼検字法をご存知ですか？ 漢字の四すみ（左上・右上・左下・右下）にあらわれる筆形を十種の類型に分け、それを0から9までの番号で表わします。そうするとすべて漢字は四桁の数字で表わせます。索引には漢字をこの番号に従って配列してあります。この方法を覚えると漢字の検索が非常に速くなります。

日 時：11月19日（土）午後1時30分～4時30分

場 所：中国語研修学校 301教室（中国研究所内）

参加費：無料

講 師：片山博美（中国語研修学校専任講師）

● 中国の真相に肉薄する研究誌 ●

季刊 中国研究

A5判 約170頁 定価2,000円

編集発行・(社)中国研究所／発売・研文出版